

## 4月度 定例会

## 映画「おだやかな革命」を鑑賞して

2019.4.26 地球環境に学ぶサークル 中島峯生 編集

開催日時：2019.4.14(日) 10:50~12:30、

場 所： 新所沢公民館ホール

主 催：一般社団法人 所沢市民ソーラー、後 援：所沢市、所沢市教育委員会、ところざわ倶楽部、他 6

上 演：映画「おだやかな革命」監督 渡辺智史、ゲストトーク 市民電力連絡会理事長 竹村英明

## 1. 映画「おだやかな革命」の概要

『自然エネルギーによる地域再生。これからの時代の「豊かさ」をめぐる物語』として、福島県の酒蔵当主が立ち上げた会津電力そして原発事故により全村避難になった飯舘村の畜産農家が立ち上げた飯舘電力、秋田県にかほ市の生活クラブ生協の風力発電、岐阜県郡上市石徹白集落の小水力発電、岡山県の間伐材を使った地域温泉施設の熱源、5例の「豊かさ」を求めた映画です

## 2. 会場風景



受付



会場1



会場2 竹村氏のトーク



司会 中原氏



挨拶 所沢マチエコ大使上田マリノさん、河登氏



退場時の受付

## 3. 映画の感想文集

A氏 (担当)

映画に出てくる自然に恵まれた田舎の風景は、会津若松で高校時代を過ごした私にとっては、懐かしさ以上に、生活の厳しさも思い出させる。そんな山深い田舎が自然エネルギー資源を活かす仕組みづくり

によって豊かな村や町の地域につながる取り組みは素晴らしいと思う。

「おだやかな革命」上映会は、お陰様で約 150 名の市民が足を運んでくださり、多くの人から「とても良い映画だった」と言ってもらえた。私たちの市民ソーラーの取り組みにも賛同して下さり、何人かが上映後に資金的協力を申し出て下さり、映画の力と所沢市民の再生可能エネルギーへの深い理解に大いに感動した次第です。

## B氏

題名通りの日本各地のおだやかな風景が画面にはずっと続きます。そこには原発事故後各地で様々な工夫、努力が続けられ大地にしっかりと根をはった確かな暮らしがありました。「エネルギー自治」ってなんて素晴らしい言葉でしょう。若い世代との共存もあり、明るい未来の兆しも感じました。もう一度観たいと思いました。

## C氏

分散型エネルギー生産と地元消費、これからの持続的社会的方向と感じました。実現にはかなりの知識と情熱が必要ですが、多くの人がある気になれば、日本のおだやかな革命はまだ不可能ではないとの印象を受けました。

## D氏

私達は福島で起こったこと、今の現状を忘れてはいけない！お金や物とかだけが幸福じゃない！と訴えている映画だと思うが、そうは言っても自分に置き換えることができるかと、考えさせられる映画だった。

## E氏

代表的な5地区の特徴有る自然エネルギーを活用した再生エネルギーによる豊かな暮らしを知る事が出来た。以前、北杜市、那須の小水力を活用した発電の見学をした時、情熱的な説明を聞いたことを思い出す。その後、東北大震災による原発事故を経験して、分散形電力が見直され地の利を生かしたより良い生活も選択肢にある事を知らされた。

## F氏

地域の特性に合った自然エネルギー（ソーラー発電、小水力発電、風力発電、間伐材による熱源など）を自らの手で作り上げることで生きがいや喜びに満ちた暮らしが生まれてくる。そして過疎対策・高齢者対策と一石二鳥以上の効果があることを証明しているこの映画で、未来に対しての希望が見えてきました。

## G氏

所沢には、手入れの行き届いていない杉林や雑木林があり、遊休農地がいたるところに目立ってきている。それらを利用すれば、家具や建材ができ、バイオマス発電もできる。遊休農地は、ソーラーシェアリングで電気ができ、作物もできる。地産地消のタネはたくさんあるので、映画のように、あとは市民パワ

一の結集である。

## H氏

上映時間100分が長く感じられない良い映画でした。自然エネルギーの当所沢地区の活用は6年前の「マチごとエコタウン所沢構想策定」段階で議論されていました。映画を見終わった段階で、矢張り所沢でのエネルギー賦存量は太陽光（熱）が断トツに多く、これと歴史ある農業とマッチングした「ソーラーシェアリング」を推進すべきとの、意を強くしました。

## I氏

- (1) 今回でこの映画は3回見たことになる。  
その都度新たな感動を覚えるが、自然エネルギーはこれから重要な試練の時期に入る。
- (2) その理由は、政策当局（政府・経産省）が原発推進の政策を固持しているからである。  
現在再稼働している原発は9基（約910万kW/発電量の約5%）しかないのに、政府のエネルギー基本計画上は、2025年の原子力が20~22%も占めることになっている。そのためには原発の新設、40年を超える稼働が前提であり、原発は推進すべき重要なエネルギーと位置づけている。今日の新聞報道では、政府は「小型原発を推進」するそうである。
- (3) FIT が終わる今年から、9大電力はFIT後の体制作りに全力を挙げている。彼らにはコストの安い、償却済の再稼働原発や、石炭火力を含む過去の蓄積があるので、蓄積のない新電力はひとたまりもない。
- (4) このような時期にこそ、「政策当局」はパリ協定を尊重する方向で自然エネルギー優先政策を採用すべきなのだが、その希望は叶えられそうもない。「託送料に原発コスト」「容量市場」「原発に補助金」「小型原発推進」など、権力を背景にした原子カムラは依然として力強く生き残っている。
- (5) 政権交代に望みを託すしかないのだろうか。

以上